

花 閣

はなやみ

田久保英夫



花 はなやみ 闇
田久保英夫

新潮社

昭和五三年二月一五日 印刷
昭和五三年二月二〇日 発行 定価九八〇円

花 はなぐみ 闇

© Hideo Takubo,
Printed in Japan, 1978.

著 者

たくほひでお
田久保英夫

発行者

佐藤亮一

印刷

二光印刷株式会社

製本

大口製本株式会社

発行所

株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地（郵便番号一六二）

電話（編集部）〇三一二六六—五四一一

（業務部）〇三一二六六—五一一一

振替 東京四—八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

花

園



田久保英夫

鳥	驟	薄	虚	あ	ね	海	蘇
の		い	空	か	む	の	る
よ			の	つ	り		
う			の	き			
に	雨	氷	塔	雲	草	光	夏

123	105	94	78	57	45	26	7
-----	-----	----	----	----	----	----	---

渚	春	薔	告	寒	三	満	通り過ぎるもの
か		薇		い	又	ち	
ら	雷	の 刺	知	朝	路	潮	

241	229	215	201	179	165	150	135
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装幀 藤田吉香

花

闇

蘇　　る　　夏

おかしな一日だった。

まるで陽がさんさんと照っているのに、つよい雨脚で驟雨が降りはじめたような、不思議にちぐはぐな気分。そう朔子は思った。

朝、夫の厚三をテニスに送り出した頃は、何ごととも順調だった。厚三は勤めが休みの日には、いつも近くのローンテニス・クラブへ行く。学生時代の後、遠ざかっていたのを、去年から中年肥りを気にして、ふたたび始め、たちまち熱心になった。自分の専門のこととか趣味になると、しつこく打ちこんでしまう方なのだ。

朔子は夫が頸にタオルを巻きつけ、わきの下にラケットを挟いこんで、庭の木戸を出て行くのを見送った。

「電話、頼むよ」

むっそりそう言って、眼で笑い、道路へ下りる。頸すじの肉がたるみ、短い髪に銀色に光るものが目だつ。いつもそんな夫を見ると、三十七にしては老けている、と思うが、今日はさほどに感じない。白い半袖ジャケットとショーツから、腕や腿が琥珀色に日焼けして、筋肉を若々しくうき出しているからだ。それは目的地しか頭にないように、機敏に高台の坂道を遠ざかる。車もあるのに、いつも十五分あまりかかる道を歩いて行く。

朔子は今夫の靴を払った刷毛を、縁側におき、庭の石楠花を眺めた。フェンスぎわにうす桃色の花房が、もう醗く萎れて咲いている。しかし、いくつか苔もあって、五月の日光がその水気のにじむ尖端を煌めかせている。太陽の光は自分の二の腕にも射し、普段よりずっとその皮膚が生白

く透くように見える。手の指も、家事をしていて荒さなくように気をつけているのに、すこし荒れて、透明なマニキュアが剥がれかかっている。

朔子は不意に奇妙な幸福感到襲われた。ほとんど理由のない幸福感。自分のせいでも、家庭のせいでも、もちろん夫のせいでもない、ただ陽の中の獣のように、この瞬間生きていることが、無上の喜びに思える感覚……。

それはほんの束の間の感覚だけに、どこか悔恨に似たものも交じっている。この喜びを引きとめたくても、時間は一瞬一瞬どんどん過ぎる。この自分の肌のかがやきも、二十代の若さも、きつともうすぐ消える。

「恭子ちゃん、恭子ちゃん。さあ、ドアをあけて」
裏の家から、老母の恒の鼻にかかった声がする。

「恭子ちゃん。どうしたの？ お返事なさい」

しかし、五歳の恭子は、返事をする気配がない。また裏の家の洋間に、なかから鍵をかけて、祖母をしめ出してしまったらしい。恭子は幼稚園の二年目に入って、急に祖母をからかったり、かたくなに振る舞うようになった。

恒の暖れた、どこか舌のからむ声はまだつづいている。

朔子はそれを聞くと、すぐに家の中へ戻る気持をなくした。棟が違うのでまだたすかるが、去年の春、恒がここへきてから、自分たちの暮しがずいぶん変った。そんな気がする。

もう四、五年前、夫の会社と同じ資本系列の信託銀行で、この多摩川を見下ろす分譲地を造成した時、厚三はその一画を優先的に買った。会社からは低利の融資など、特典があるのだ、部下や同僚もやはり三、四人買った。その時、夫は土地代や建築費の一部を、秩父の父親に出してもらったが、中小の織物工場主の父は、自分も同時にとなりの区画を買っておいだ。投機のためか、自分で住むためか、わからない。しかし、去年その父が病気で死ぬと、母親の恒が小さな棟を建てて移ってきた。

朔子は花群の重みで傾いた石楠花の枝を、手で起した。そうして枝さをフェンスに縛ろうと、地面に紐をさがしたが、その途端、柵ごしの道路を、黒い服を着た男が一人やってくるのが眼に入った。朔子は一瞬、その男の顔に見覚えがある、と思った。

しかし、ほんとうは見覚えなどある筈はなかった。

男はもう初老だろうか。黒い服装はよく見れば、ドスキンの略礼服のようだ。けれども、襟がすり切れて、光るほど着古している。縞のワイシャツも皺だらけで、襟が片方はみ出し、銀灰色のネクタイが不恰好に下っている。

あさ黒く、肉の厚い顔にも皺が走っているが、眉毛は太くて、骨格はいいに彫りが深い。

そんな男が、坂道を落ち着きなく見まわしながら、のぼってきて、ふとフェンスの蔭の朔子に眼をとめたのだ。朔

子が胸をつかれる思いがしたのと、相手が黒い眉をあげたのと、ほとんど同時だった。

「ああ」男は小さく言っただけ、声を切つて、じつとこつちを見つめた。

その大げさな驚き方と裏腹に、気味悪いほど静かな眼つきだ。朔子は思わず、相手もこちらに見おぼえがあるのかと錯覚しかけた。

「奥さん。この近くに、間宮さんというお宅がありませんか」

男は煙草の脂のたまつた歯を見せて言つた。

「あら、間宮さんでしたら」

朔子は坂道の上に、大谷石の垣が小だかく積まれた公園を指した。間宮は夫と同じ会社で、部下筋にあたり、その公園の裏手に家がある。

「あそこに、古墳公園がございますから、その裏の石段の前です」

「これはどうも……」

男は分厚い肩をかがめ、手に提げた小さな黒トランクを揺すつて会釈した。

そのトランクの口金のわきに、「隆徳」と赤い字で書いてある。それはよく区会議員などが、電柱に名前を書くような、どこかわざとらしく目立つ入れ方だ。男は鞆を軽々と持つて、五、六歩行つたが、またさう気なく足を止め、

眼を細めてこつちを見た。

「何ですの？ 私の顔に何かありまして」

朔子が笑つて訊くと、急に相手は大げさなうろたえ方をして、

「いや、いや。奥さんがあんまりお綺麗だから……。いや、失敬」男は半白の頭を小さく下に下げた。

「ほんとに美しいということは、いいんです。美は私らが立つ地上より、いつも少し高いところにあります」その声はどこか説教調になつた。

「でも、美は無償なものじゃありません。薔薇にもトゲがあります。こんな花も、地中の暗い土が咲かせます」

男はまた脂のたまつた歯を見せて、ゆっくり背中をむけて歩き出した。

朔子はそのうしろ姿が坂道を遠ざかると、急いで縁側から、家の中へはいった。

台所には、朝食の片づけものがまだ残っている。流し台のまえに機械的に立つと、半ば開いた窓ごしに、裏の家の廊下がわずかに見え、その籐椅子で恒と恭子の喋りあう声が聞える。朔子は今の男の記憶を、早く洗い流そうとするように、勢いよく水栓をひねった。

しかし、その妙に静かな、しつこい視線は、まだ自分のなかに不快にまといつている。あの男はいつたい何だろう。黒いトランクなどを持つて、セールスマンだらうか。

きつと間宮の家で訊けば、わかるに違いない。

朔子は「お綺麗だから」と言った男の声を思い出した。しかし、それは言葉とまったく違った意味が感じられる。

そんな口さきと反対に、男の眼にはたえず冷静な気配があった。こつちをほめるより、その冷たい光にひき込むような視線だ。最初にこつちを見て驚いたのも、何か別なもの、自分の顔に感じたせいという気がする。

あの説教口調も、あるいは「美」よりも、「トゲ」や「暗い土」に重点があるのかも知れない。あの男はこちらにそんな不穏な、いまわしい影を感じたのかも知れない。とすると、男は人相見か何かだろうか……。

朔子は洗いかけた皿を抛り出し、台所の椅子へ腰かけた。さつき庭で感じた幸福感など、少しもなくなっていた。

テーブルの上に、甘みがこぼれたのか、蟻が何匹、何十匹となく列をつくっている。朔子はほとんど無意識に、指さきでそれを殺した。

朔子はちよつと上半身を動かして、壁の丸鏡に顔を映してみた。どこか心をはりつめて、普段よりすこし肌の青白い自分が、そこにいた。眼を大きく、まっすぐ自分の影に据えて、内がわのやや過度な熱気に光っている。

もう十年もかかりつけの美容師に、昨日カットさせたばかりの髪は、ゆるやかな波立ちで、広すぎる額を隠している。その額と、厚目の唇のほかは、さほど厭ではない今の

顔だ。

しかし、朔子はもう長い間、自分が人から「お綺麗」などと言われたことがないのを思い返した。空疎なお世辞でないそんな言葉を……。他人に言えば笑われるが、十代の娘の頃はそうではなかった。

母が若死にして、かわりに家へきた独身の叔母が、身の廻りを神経質なほど、念入りに手をかけたせいもある。にぎやかな道や会合の席では、うわべの言葉だけでなく、無言の視線を、しばしば意識した。学生の頃は、多少名の知られた建築家の父に、母のかわりに介添して、よくパーティーや旅行にも、一緒に出た。二年間、欧米で仕事する父に同行して、パリで暮したこともある。

しかし、今はそんな派手やかな他人の中の暮しは、まったくない。細心に化粧しても、夫も別にほめることなどはない。

恒がきて、用事がふえたせいもあるけれど、めったに繁華な都心へも出ず、足をむけるところと言えば、車で行く川向こうのスーパーマーケット、この分譲地の同じ会社の家族会、幼稚園の母の会……。自分が同年配の女性とのつき合いを、好かないためもあるが、こうしてだんだん偏屈に、自分で何の実も生まず、齢をとっていくのかも知れない。

朔子は椅子から腰をあげた。この連休日には葉山の老父

から、出かけてこいと、電話で誘われていることを思い起した。

今日か明日、夫を誘って、もし行くなら、車で出かけよう。夫が断るなら、自分だけで横須賀線で行こう。そう考えると、朔子は流し場で洗いものの手を早めた。

「朔子さん。シャーベット、買い置きあるかね」
勝手口のドアを手荒くあけ、恒が入ってきた。

「はい、あると思いますが」

「ある、ある」

こっちの返事より早く、恒は冷蔵庫の扉をあけ、メロンのシャーベットを二個つかみ出した。

「恭子が食べたいんだって」

目ざとく卓上の木の匙を拾って、また小走りに土間を出ていく。と思うと、ほんのわずかの間に、また急いで戻ってきた。

「そうだ。恭子は金のスプーンがいんだっけ」

「はいはい」

朔子が食器戸棚のひき出しから、スプーンをとり出している、恒はその間にあたりに眼を配って、

「あら、もうお昼の支度かい。早いね」と笑顔で言った。

こういう恒の言葉は、本気でそうとり違えているのか、こっちへの厭味なのか、よくわからない。

もう七十で、自分では年寄りだ年寄りだ、とくり返すく

せに、意外に頭がよく廻る時がある。見かけも、髪を黒く染めて、頭頂部の禿にカモジを入れているせいか、いつもたつぷりと丹念に纏められている。

小柄な、まるく肉づいた体はワンピースなど着ると、裾が帆のように傾いて不恰好だが、和服の時は、さすが銘仙工場の娘だけに、きちんと着る。気がならないと、もうだめ、だめよ、と一日じゅう蒲団の中で寝ているくせに、恭子のことなどは、突然今のような敏捷さで動き出す。

炊事や掃除でも気まぐれに働き出すと、こっちが手を出す隙もなく自分流に片づけたり、外出から帰った時、台所がこれ見よがしに、ぴかぴか磨き立てられていることもある。

それを老人の厭味ととると、ついお腹が熱くたぎる気持ちがする。秩父の旧家の跡とり娘で、養子を迎えたわがままが直らないのだ、と思ったり、こんな手で女工を虐めてきたのだ、と思ったりしてしまふ。

しかし、そうとばかり言い切れないのは、姑がどこかけろつとして、邪気もなさそうに見えるからだ。こんなに自分を傷つけることも、老人の鈍った感受性にはわからないのではないか、とも思えてくる。

けれども、そのとぼけた、滑稽でさえある挙動も、もし考えてやっているとすれば、この姑はとても自分など手に負えない知恵者だ。

「お母さん。スプーンぐらい、恭子に自分でとりにこさせて下さい」

「いいじゃないか。私が最初に忘れたのよ」

恒は光る匙を二本持って、また小走りに勝手口へ下りる。「でも、お母さんにお世話ばかりかけて。だんだんいい気になります」

恒がきてから、しだいに恭子が自分で何もできなくなるのを、心配していたので、朔子はかまわず流しの窓から、

「恭子、恭子……」と呼んだ。

「いいよ、いいじゃないの」

老母がつよく手を振った時、裏の家の縁先から、跣で地面を踏むらしい足音がして、恭子が扉口に小さな顔をのぞかせた。

敏感に成り行きを察したらしくむっとおし黙って、母親に似たかたちの唇を、おちよぽ口にしている。

「恭子。お匙ぐらい、自分でとりにきなさい」

別の匙を食器戸棚から出して、さし出すと、恭子は膝で這って床をあがってきて、つかみとるように受けとった。

「いいのよ。お祖母ちゃんとは、お互いさまなのよ」口のなかで呟くように言う。

「お互いさま？」

「今度はお祖母ちゃんに、シャーベット、匙で食べさせてあげるから」

朔子は娘の肉の薄い顔を見まもった。

それはまるで恒が孫を猫可愛がりして、甘やかすだけでなく、自分が幼児の年齢までおりて行つて、二人が同じ世界にくるみこまれているみたいだ。

恭子にとっては居心地がいいから、すぐ裏の家へ行きたがるが、それでは子供の心の成長に障るだろう。母親の眼でみると、恭子はどんどん可愛げをなくしている。

「早う。行こ。行こ。シャーベットが溶けちゃうん」

恒はわざと関西弁を真似て、孫のスカートをひっぱった。「ちゃんと、自分で足を洗いなさい」

朔子が娘の跣を見ていうと、

「ママのママゴン。アクマゴン……」恭子は勝手口に立つて、小さな舌を出した。

「そんな言葉、どこで覚えたの？」

思わずにらみつけると、娘は祖母といっしよに慌しく路地へ消えた。

朔子はいま戸口で一瞬、薄笑いを浮べた恒の顔に、きつとアクマゴンなどと言葉を教えたのは、この祖母にゃない、と思った。裏の家で、自分をこんなふうに呼んでいるのかも知れない。朔子は自分で邪推がすぎる気もしながら、胸がきゅっと熱くなった。

その熱さを体のおくで抑えて、手早く食器を洗う。家の中のこまごました用が、ときに高いハードルのように思え

ることがある。気持のゆらぎ方によって、その日常の用事は、卑小な、それだけに跳びにくい、幾つものハードルのように見えてしまう。

けさはこっちの家の掃除もしなければならぬ。だが、早く裏の家の掃除もしなければならぬ。

裏の敷地は七十坪ほどある上、恒が一人で住むのに、秩父の長男や娘夫婦を泊める部屋とか、神信心の仲間を呼ぶ部屋とか、台所や風呂場もひと通りつくったから、かなり広い。

朔子は洗いのをすませると、さっさと昼食用のサラダの下ごしらえをした。ハードルが跳びにくい時は、とにかくコマ鼠のように体を動かすにかぎる。体はまだ若くて、疲れを知らないから、そのうち気持もまぎれてくる……。

「あら、トカゲ。ちっちゃい、綺麗なトカゲ」
裏の庭で、恭子が大声をあげている。

「まあ、厭。近よるんじゃないの。こっちへおいで」

恒は草とりでも始めたのだろうか。朔子が気配をうかがうと、缺で木の枝を切るような音がする。それから、庭の水道栓から、ばしゃばしゃと水を流す音とか、シャベルで土を掘るらしい音とか聞えていたが、急に「あら」と恒の声がして、表のフェンスの方へ遠ざかった。

かすかに遠くで、恭子のかん高い声がする。誰かと話しているらしい低い声も聞えるが、夫が帰ったのだろう

か。

その時、居間で電話が鳴った。朔子は夫に、電話の言づけを頼まれていたのを思い出し、小走りに廊下へ出た。

居間のサイド・テーブルで、受話器をとると、

「もしもし、秋元でございます」

聞きおぼえのある女の声が流れてきた。秋元はやはりこの造成地に住む、夫の会社の同じ事業部門の課長だ。

「けさから、お宅へご連絡するようにとのことですけれど、うちはまだ出かけておりまして」

秋元夫人の喉にかすれた声だが、きれ目なく喋りかける。

「午後には家に用もありますので、帰るはずですけれど、あまり遅れては、と思ひまして」

「はい、そのこと。お会いしたいと、聞いております。ちよっとお待ちになつて」

朔子は表の柵の方へ、夫が帰ったのかどうか、たしかめようとして、受話器を置きかけた。しかし、相手は、

「いえ。そうお伝え下さいませ。ではまた、のちほど……」と逃げるように電話を切った。

すこし不審な気もした。けれども、そのすぐ後で縁側越しに、厚三が額を汗で光らせ、木戸から入ってくるのが見えた。片手でタオルをつかみ、頸すじの髪をこしごしこすっている。その肘にも白いシヨーツにも、乾いた泥がついている。

フエンスぎわの道路で、恭子と恒が大きな紙風船をついて、声をあげているのは、夫が買ってきたらしい。

「今、お電話あったのよ。秋元さんの奥さまから」

朔子が言うと、

「うん」厚三は顔を拭くタオルの下で、ちらと臉を強くあげてこっちを見た。それは関心を急に集中したときの、夫の癖だ。

「まだ、お出かけですって」

厚三は黙って、布ケースに入ったラケットを縁側へ置き、廊下へあがった。別に屈託もありそうに見えないが、眼にいつもの笑い皺がない。

朔子はさっきの秋元夫人のあわただしく喋り、切れた電話を思い浮べた。いつもはもつとくどいほど、余計な長電話もする人だ。まさか居留守というわけでもあるまいが、会社のことで何かあったのかも知れない。

朔子はこの住宅地で、同じ会社の家族たちとつき合うのを、ときにうっとうしく感じてしまう。間宮と秋元のほかに、もう二軒あるが、一軒はさいわい台湾へ長期出張で、いま無関係な家族が留守居している。それも、年長の間宮の奥さんの世話焼きで、家族の集まりなど持っているためかえってお互いに会社での位置や、暮しぶりへの眼がはたらく。

ことに秋元は厚三と同期で、その化成会社の総務系統を

ずっと歩いてきたが、去年、夫のいる繊維事業部門の課長になった。しかし、厚三は部次長なのだ。会社のことは女の自分にわからないことが多いが、夫のような男が切れ者とされ、同年齢でいちばん高い地位につくことも、その一つだ。

ふいに後ろから、スカートの腰に夫の両手がかかり、まるで品物でも移すように持ち上げられた。あ、と朔子思ったが、別に叫んだりしない。

もう結婚したての頃から、思わぬ時にそれをやられた。

自分も女として、そう小柄な方ではないが、厚三は一メートル七十八センチもあり、今より若くて肉もついていたから、軽々と人形を移すように両手で持ち上げる。こちらも驚きと心のはずみで、足が宙に浮きながら、相手の髪を両手でつかんだりした。

しかし、厚三は何をされようと、悠々と両手でこっちを支え、女の目方を愉しむように左右にすこし振り廻したりする。それから、二、三歩わきへ下ろすと、齒を見せながら、むこうへ行ってしまう。

今でも、同じ調子だが、前より腕力が衰えたのか、両手の力がずれて、ブラウスのわき腹のところへくる。朔子がさからうと、ふわりと居間の敷居の上へ下ろして、笑いもせず、浴室のドアを入ってしまった。

そのにこりともしないのが、氣に入らない。ほとんど仏